

紙つづて

物事の品質を保証し、向上させるために「評価の眼」が必要だ。科学界には信頼できる批評家、評論家がない。度量衡の精緻な計測と数理解析を尊重するため、人間疎外の数値評価が横行する。科学論文には一言一句に、自分の研究、先人の仕事による裏打ちが求められる。だから、数十篇の論文を引用する。そして「何回引用されたか」が論文の価値指標となる。この数値分析に意味はあるものの評価とは言い難い。

近年は欧米の商業的情報機関がコンピューターを駆使。データを集計し、加工して世界中の大学、研究所、行政機関に売りつける。この統計値が研究者の人事、研究資金配分、各種授賞審査、学術誌の格付けなども差配する。この分析法を発明した

真つ当な研究評価を 野依 良治

ガーフィールド自身は「引用の内在的価値を評価するのが科学的知性」と戒めるにもかかわらず、だ。

寺田寅彦が言うように「科学の真価は非科学的なもの、認識論とも照らしめて、批判的に見た上でなければ理解できない」はず。由々しき事態になったのは、評価を託された研究者の怠慢。科学的批判力の欠如、多数決信仰、画一的な入学試験に慣らされ、客観的数値比較を公平とする価値観にある。

数値化できないものは無価値か。われわれは対面して人物を統合的に見極め、実物に接して五感で品定めしてきた。小異に依存して自由闊達な創造的営みを判断できるわけではない。評価行為とその方法は、被評価者の行動規範を左右する。本質に迫る洞察力の醸成こそが、科学水準の向上に資する。

(理化学研究所理事長)

2013.5.13